

【無頼派とは】

〈無頼派〉とは、終戦直後に若い読者たちの人気を博した一群の作家たちのことです。はじめ、読者へのサービス精神から〈新戯作派〉とも呼ばれたその範囲は明確ではなく、諸説ありますが、太宰治・坂口安吾・織田作之助・田中英光・石川淳・檀一雄らを指すといわれています。

彼らは共通の活動基盤を持っていたわけではなく、それぞれ独立した作家として文学界に登場していました。にもかかわらず、〈無頼派〉というあざやかなイメージを持つ一派として括られるようになったのは、彼らの文学に、〈反逆精神〉、〈自己に対する厳しい批判〉と〈含羞の身もだえ〉、〈常に日本の現実から目を離さず、それに突き刺さり運命を共にする決意〉、〈作品の巧さ、感性の鋭敏さ〉¹⁾という共通の特徴があったためであり、また彼らの作品世界および実生活が時に放蕩無頼の一面を持ったからとも言えるでしょう。

【太宰の〈無頼派宣言〉】

日本で〈無頼派〉という言葉を使い始めたのは、太宰治であるといわれています。彼は戦後第一作「パンドラの匣」の中で、「リベルタンつてやつがあつて、これがまあ自由思想を謳歌してあげれば廻つたものです。／たいていは、無頼漢みたいな生活をしてゐたのです。／時の権力に反抗して弱きを助ける」と登場人物に言わせ、また人に宛てた手紙²⁾の中でも「私は無頼派(リベルタン)ですから、この気風に反抗し、保守党に加盟し、まつさきにギロチンにかかつてやらうかと思つてゐます」と書いています。いわゆる太宰の〈無頼派宣言〉です。これは戦後の迎合的風潮や便乗主義などをシニカルに批判する台詞であり、後年太宰らが〈無頼派〉と呼ばれるようになる大きな一因となりました。

【太宰と無頼派の作家たち】

太宰治と交流のあった無頼派の作家としては、坂口安吾・檀一雄などがあげられます。坂口安吾は、新潟生まれの作家で、「桜の森の満開の下」などの名作があります。太宰治とは、1934年4月の『鶉』創刊号に同時に掲載された頃から互いに意識しあい、また、互いを評価していたようです。太宰の死後書かれた「不良少年とキリスト」は太宰の本質を見抜いた評論です。読者を喜ばせる戯作者精神・自意識のあくなき追求など、共通するモチーフが見られる反面、考え方の相違点も見受けられます。檀一雄は山梨生まれの作家で、1933年『新人』創刊号に作品が掲載されたことによって、古谷綱武のなかだちで太宰治との交流がはじまり、他の作家らと共に、同人雑誌『青花』を創刊したこともありました。代表作に日本文学大賞を受賞し〈最後の無頼派〉たる面目を示した「火宅の人」があります。

- 1)『太宰治論』(奥野健男著 近代生活社 1956)より
- 2)1946年1月15日付井伏鱒二宛書簡

参考文献:

- 『時代別日本文学史事典 現代編』(東京堂出版 1997)
『太宰治 新潮日本文学アルバム 19』(新潮社 1983)
『太宰治大事典』(勉誠出版 2005)
『日本近代文学大事典』(講談社) ほか



DAZAI OSAMU 1909.6.19-1948.6.19

【はじめに〜いま読む、ダザイ〜】

今年が太宰治生誕100年に当たります。各地で記念イベントが行われ、4作品の映画化(「斜陽」「ヴィヨンの妻」「パンドラの匣」「人間失格」)が決まっています。

書かれて60年以上が経過した今でも、彼の作品は多くのひとの心をとらえ、古さを感じさせません。

太宰の面白いところは、作品だけでなく、太宰本人、人間としての太宰を愛するひとが後をたたない点でしょう。作品が彼本人のイメージと分ちがたく結びつき、独特のロマン漂う太宰像を築いているのです。その一方で、作品を読んだことはないけれど、なんとなく太宰嫌いという、食わず嫌いのひとが多いのも本当です。

しかし、彼の作品には、〈自意識過剰のナルシストで、放蕩生活の末に心中事件を繰り返した男〉というステレオタイプの太宰像とはかけ離れたものも多く見られます。突き抜けたユーモア、そのサービス精神、自虐と諧謔のバランス感。そして文章のリズムと巧さなど、さまざまな顔を見せてくれる作家なのです。

食わず嫌いはもったいない。手垢のつかない、〈あなたの〉太宰を発見してみませんか。

関連講演会「ひとこと余計な太宰治」(仮)

講師 山口俊雄(愛知県立大学日本文化学部)

日時 2009年10月14日(水)午後2時30分より

会場 長久手キャンパス学術文化交流センター2階小ホール

入場無料・事前申し込み不要

【主要作品介绍～今年映画化される4作品～】

『斜陽』 新潮社(新潮文庫 改版) 2003

～「戦闘、開始。／恋。それだけだ。」

終戦後の日本を舞台に、没落していく貴族家庭と、主人公・かず子が思いを寄せる流行作家・上原の姿を描く。「恋と革命のために生きる」かず子のモデルは太宰と関係のあった太田静子。映画は佐藤江梨子・温水洋一出演で5月公開。

『ヴィヨンの妻』 新潮社(新潮文庫 改版) 2009

～「人非人でもいいじゃないの。」

私たちは、生きていさえすればいいのよ。」

才能ある詩人だが、酒飲みで多額の借金をし浮気を繰り返すなど放蕩生活を送る夫・大谷と、その妻・私の物語。ラストは赦しなのか、索漠なのか？ 太宰、死の前年の作品。

映画は松たか子・浅野忠信出演で10月公開予定。

『パンドラの匣』 新潮社(新潮文庫 改版) 2009

～「透明に、ただ軽快に生きて在れ！」

結核を患う二十歳の「僕」は、「健康道場」と称する療養所に入所した。古い気取りを捨て去り、新時代に向かう日々を、友に宛てて綴る書簡体小説。主人公のモデルは太宰に私淑した木村庄助で、彼の日記が作品の元になった。

映画は染谷将太・川上未映子出演で10月公開予定。

『人間失格』 集英社(集英社文庫) 1990

～「恥の多い生涯を送って来ました。」

幼い頃から人が恐しく、しかし人とつながることを思い切れない主人公の選んだ道は「お道化」になることだった。あまりにも有名な太宰の代表作。

映画は生田斗真出演で2010年春公開予定。

【ダザイズム豆知識】

絶筆「グッド・バイ」

当初は新聞連載を予定されていましたが、太宰の死により未刊絶筆となった作品。

タイトルからして死の匂いただよう暗い小説かと思いきや、ハイテンションのギャグが炸裂する喜劇です。もうひとつの太宰の顔を垣間見ることのできる好編です。

〈桜桃忌〉とは？

太宰治の忌日(6月19日)のこと。

彼の名作「桜桃」にちなみ、同郷の作家・今官一が命名しました。なお、玉川上水に入水自殺した太宰の遺体が発見されたのは、奇しくも彼が生を受けた6月19日と同じ日でした。

当初は太宰の友人知己が在りし日の彼を偲ぶ集まりでしたが、その後彼の作品を愛する読者たちが墓前に参るようになり、現在に至っています。

「走れメロス」再読

国語の教科書等でおなじみのこの作品。残念ながら道徳教育の影響か、ただ説教くさい話として記憶するひとも多いのですが、改めて読んでみると、新たな発見がある一編です。

「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の

王を除かなければならぬと決意した。」

シラーの詩を下敷きとした明快な筋立てを、躍動感溢れるリズムで語っています。音読したくなる文体は、同時期に発表された「駆込み訴え」に通じるものがあります。ラスト一文のオチも効いていてうまいのです。